

隣の人妻は、俺の前でだけ無防備になる――お裾分けから始まった、隣室の奥さんとの秘密――

夫に見てもらえない専業主婦の奥さんが、年下の隣人にだけ、少しずつ甘えていく背徳
純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

同じ階の住人は、みんな篠宮美月しのみや みづきを「感じのいい奥さん」だと言う。

七〇五号室の、いつも穏やかで、廊下ですれ違えば品よく会釈する、隙のない人妻。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

夜のとりみが、部屋の隅々まで満ちていた。常夜灯のほのかな橙だいだいだけが点って、カーテンの向こうでは、マンションの外廊下の灯りが遠くにかすんでいる。隣の部屋——数歩しか離れていない、自分の暮らす七〇六号室。その壁一枚を隔てた向こうに、彼女のもうひとつの生活があることが、今はひどく遠いことのように思えた。

昼間の美月を思い浮かべる。エコバッグを提げて買い物から帰り、エレベーターで一緒になれば「成瀬さん、おかえりなさい」と柔らかに微笑む。ゴミ出しの朝、町内の誰にでも丁寧ていねいに頭を下げる。同じ階の主婦仲間に囲まれても、一步引いた品のよさを崩さない。誰もが「いい奥さんね」と口を揃える、あの完璧な佇まいたたずまい。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……湊くん」

ゆるく巻いた栗色の髪が、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついていた。いつもは穏やかに伏せられている目もとが、今は潤んで、こちらを見上げてくる。左手の薬指で、細い指輪が常夜灯をにぶく弾く。その光だけが、俺たちのしていることの後ろめたさを、静かに思い出させた。

壁の薄いこのマンションでは、隣の物音が、ときどき聞こえてくる。けれど今、この部屋に満ちている熱を、知る者は誰もいない。壁の向こうの世界も、同じ階の住人たちも、何ひとつ気づいていない。それでいい、と湊は思った。この夜は、二人だけのものだ。

それでも——俺だけが知っている。この人の、表の顔と、誰にも見せない無防備な顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——